



田村市立都路中学校 学校だより 第18号

令和7年7月18日（金）
発行責任者：校長 佐藤 仁
TEL：0247-75-2009

めざす生徒像：自らの志を語り、目標に向かって主体的に努力できる生徒

めざす学校像：志を育む学校 学び合い、高め合う学校 信頼され、愛される学校

平和が続くには？

太平洋戦争末期、唯一地上戦があり軍人、民間人間問わず多くの人が犠牲になった沖縄において、平和を願うとともに戦争の悲劇を後生に伝承していく手段として、毎年、沖縄県平和記念資料館が「児童・生徒の平和メッセージ」を募っています。次は、沖縄在住5年生（令和6年当時）の作文です。

テレビをつけると、また私が住んでいる与那国のニュースがながれていた。

「有事があった場合には鹿児島へ避難することになるんだって。」

父が内容を教えてくれた。

「えっ。有事って何？」

と私が聞くと、近くの台湾で争いがあったとしてもすぐに島の人々が避難できるように計画していることを教えてくれた。

「それって、与那国島が戦争にまきこまれる可能性があるってこと？」

私は驚いた。

「いや与那国だけじゃなくて、沖縄本島もあぶないかもしれない。」

そう聞いて、また昔のように沖縄が戦場になるのかと思うととてもこわくなった。今のこの平和が続くためにはどうしたらいいのだろうか。

それを考えるために四月、私は家族と一緒に読谷村へ向かった。まず最初に訪れたのはユンタンザミュージアムだ。沖縄戦では読谷村の海岸からアメリカ軍が上陸してきたことや、アメリカ軍のこうげきによって多くの人が犠牲になったことを学んだ。その中でも特に心に残ったのは、暗くてせまいチリチビガマ内部の様子を再現したジオラマだった。アメリカ軍の上陸で追い詰められた人々が集団自決を決行したものだ。

「アメリカの兵に殺されるくらいなら、お母さんの手で殺して。」

十八歳の娘は必死にお願いし、母親は娘の首を切り、自らも自決したというのだ。このガマの中では、多くの子どもを含む八十三人もの人が亡くなったということだった。

「戦争ってなんてこわいんだろう。」

これまで大切に生きてきた子どもを自らの手で殺してしまうほど悲しいことがおこってしまう。これが私とお母さんだったらどうだったんだろう。そう考えるとこの事実は信じられないし信じたくない気持ちになった。暗いガマの中でアメリカ軍がせまってきたのを知り、周りの人が自決していく。もう生きる希望さえ失ってしまった人々。今の私たちのように平和にくらしていたのに他国のこうげきにあってしまった。このジオラマの前で、考えれば考える程、どうしようもない悲しい気持ちになった。こんな戦争が繰り返していいはずがない。

その後私たちはチリチビガマへ実際に行ってみることにした。急な階段を一步一步降りてゆくと暗い空間が広がっていく。奥にガマの入り口がみえた。その入り口に立つと、さっき見たジオラマの親子が思い出された。この暗やみで追われた多くの人が集団自決で命を落とした。もう戻ることのない命。とても悲しかった。ガマのとなりに建てられたお墓に手を合わせていた。

「みなさんが、戦争で傷つき、どれだけ苦しみ、こわい思いをしたのか、それを考えるたびに悲しい気持ちになりました。このようなことがおこる戦争をもう二度と繰り返さないとちかいます。」

帰り道によった読谷の海岸。空は青く、きれいな空がどこまでも広がっていた。これが平和なのだ。そこに建てられた歌ひを読んだ。

恨んでいん 悔んでいん あきじゃらん 子孫末代 遺言さな（恨んでも、悔やんでもまだ足りない。子孫末代まで遺言しよう。）

私は戦争を体験した人達の恨みや悲しい気持ち、「もう戦争をしてはいけない」という心からの叫びを感じることができた。

どうしたら平和が続くのだろう。私は沖縄でおこった戦争について知り、学ぶことが大切だと思う。戦争があった島にすむ私達だからこそ身近に戦争の悲しさを感じ、平和でありたいと考える。今ならまだ間に合うのだ。先人達の声を聞き、沖縄から世界へ平和を広げていきたい。

作者が意図したのかわかりませんが、集団自決があったガマの暗やみと読谷の青くきれいな空や海のコントラストに、なぜか切なく悲しい気持ちにさせられます。暗やみが広がるガマの中で母親に必死に殺してほしいと願う娘、愛情をそそいで育てた娘の命を自分の手で奪わざるを得ない母親。数年前までどこにでもいる平凡な親子を自決へと追い込んだ戦争。理不尽極まりないです。

作者が書いているように、まずは80年前にあった事実を知ることが大切かと思えます。そして、きれいなものを素直にきれいと感じることができる今を大切にしたいと思えます。